

彙 報

1992年(平成4年)1月～1992年(平成4年)12月

研究状況

I 班 研究

日 本 部

「満洲国」の研究

班長 山本有造

本研究は、日本の植民地支配の主要な一環をなした「満洲」—中国東北地域—につきその最終形態である「満洲国」期に焦点をあつめ、そこでの支配の実態を総合的に(政治的、経済的および文化的諸側面、ならびに日本植民地史および中国地方史的アプローチを合せて)究明しようとする。1年間の準備会ののち、1987年4月より正式に発足し、隔週月曜日に研究会を開いた。1990年—1991年の2カ年の期間延長を許可されて合計70回の研究会を行ってきたが、1991年度をもって会を終了し、報告書を作成中。

班員 山本有造 古屋哲夫 水野直樹 安富歩 山室信一(以上所内) 井村哲郎(アジア研・図書資料部) 岡田英樹(立命館大・文) 奥村弘(神戸大・文) 副島昭一(和歌山大・経) 西村成雄(大阪外大・外国語) 松野周治(立命館大・経) 松本俊郎(岡山大・経) 村田裕子(山梨県立短大)

1992年

1月27日 「満洲国協和会」と地方統治 奥村

3月9日 満洲国研究—残されたいくつかの論
点— 山室

明治維新期の研究

班長 佐々木 克

この班研究は、明治維新时期を19世紀という、広い時間と空間のなかに設定し、班員各自がそれぞれの問題関心から、明治維新という変革期の諸問題に、自由にアプローチし、研究発表を続けてきた。したがって、特に問題をしばらくこまらずに、各自が関心を

持つ問題を、それぞれ独自の方法で研究を進めていくという形をとった。班研究発足の当初は、まとまりがつかないという危惧もあったが、時間が経つとともに、おのずから共通する明治維新期のイメージが形成されていった。またこの班研究は、従来あまりなされなかった、近世史研究者と近代史研究者との合同研究の場として設定された。その結果、あえてお互いに自己の領域を踏み越えて、果敢に新しい問題提起に挑戦し、討論が行われてきたのであるが、この試みは、充分とはいえないまでも成功であったとみている。以上のような経過で、共同研究が進められてきたが、その研究成果を報告書に纏めるべく、現在班員が各自論文を執筆中である。

班員 佐々木克 飛鳥井雅道 落合弘樹 塚本明 藤井譲治 山本有造(以上所内) 青山忠正(大阪商大) 池田宏(滋賀県立図書館) 井上章一 園田英弘(以上日文研) 今西 一(小樽商大) 鈴木祥二(立命館大) 奥村弘(神戸大) 小股憲明(大阪女子大) 高久嶺之介(同志社大) 谷山正道(天理大) 高木博志(北海道大) 辻ミチ子(京都文化短大) 辻本雅史(甲南女子大) 原田敬一(仏教大) 平田由美(大阪外大) 藪田貴(関西大) 勝部真人(大阪教育大付高) 手島一雄(立命大大学院) 三沢純(広島大大学院)

1992年

1月24日 し尿問題をめぐる都市と農村 原田

2月7日 幕末・維新期の外圧と民衆 谷山
転換期における個人と組織 班長 佐々木 克

歴史の転換期において、個人がどのように生活し、いかに生き、あるいは生きざるをえなかったのか、有名、無名の群像の、ライフスタイルを明かにすることを、この研究は第一の課題としている。班員各自が、一人あるいは複数の人物を担当することにした。当面対象とする人物は、政治家、志士、公家、

大名、幕臣、学者、豪農、老農、村役人、そして俠客、女性等々、多様・多彩な群像が選ばれた。この研究は、限られた史料と時間的制約があるため、かならずしも対象とする個人の伝記的研究をめざすものではない。むしろ転換期における社会ならびに組織と個人との関わり、という問題に比重を置いている。さらにもう一つの問題は、まとめの段階での課題でもあるが、個々人の生活史を集合し、検討を加えることによって、その時代の社会のイメージと断面を、浮かび上がらせる事ができると考えており、この課題をも、常に心に留めて、研究を進めて行くことにしたい。なお転換期のある時期と特定していないが、班員の研究領域と問題関心の関係から、主に明治維新期が中心となる。

班員 佐々木克 飛鳥井雅道 落合弘樹 塚本明 藤井讓治 (以上所内) 青山忠正 (大阪商業大) 池田宏 (滋賀県立図書館) 奥村弘 (神戸大) 小股憲明 (大阪女子大) 勝部真人 (大阪教育大付高) 鈴木祥二 (立命館大) 鈴木栄樹 (京都薬大) 谷山正道 (天理大) 辻ミチ子 (京都文化短大) 原田敬一 (仏教大) 手島一雄 岸本覚 (以上立命館大学院生) 三沢純 (広島大学院生)

1992年

4月24日 打合せ
5月15日 維新変革と一士族…落合重正… 落合
6月12日 城多董と岩倉具視 佐々木
26日 阪谷素について 小股
7月17日 一農民にとっての幕末維新…若山要助… 塚本
10月2日 幕末の老中小笠原長生と徳川家再編主義グループ 青山
10月16日 山稜の再発見…戸田忠至… 飛鳥井
11月13日 制度創草期における神田孝平の洋学 鈴木栄
11月27日 俠客の社会史…小林佐兵衛… 原田
12月11日 「国益」をめぐる群像 谷山
貝原益軒とその時代 班長 横山俊夫

17世紀後半から18世紀初頭にかけての安定期日本社会の性格を考えるため、貝原益軒の著述を学際的な視野から検討した。益軒の知的活動の広さとその読者層の多様さが、彼の著述に独特の社会性を与え

ていると考えてのことであった。

第4年度末は、報告書作成にむけ、班員各自の論文要旨発表が続いた。なお昨年に続き、インディアナ大学のジョージ・エリソン教授が客員であった。公式の研究班活動は1992年3月をもって終了とし、報告書は1993年中に公刊の予定である。

班員 ジョージ・エリソン 塚本明 富永茂樹 藤井讓治 麥谷邦夫 横山俊夫 (以上所内) 松田清 (教養部) 梶山雅史 (岐阜大) 白幡洋三郎 (日文研) 辻本雅史 (甲南女子大) 深澤一幸 (大阪大) 三浦國雄 (大阪市大) 三浦秀一 (東北大) 横田冬彦 (神戸大) 松村浩二 (大阪大院生)

1992年

1月20日 益軒と三歐人ーテン・レイネ、ハルマ、ケンペル 松田
1月27日 中国養生思想の伝統と 貝原益軒『養生訓』 麥谷
2月10日 詩人としての貝原益軒 深澤
2月17日 益軒と灸 横山
3月2日 益軒と童蒙一読書作文指南 梶山
近代日本のアジア認識 班長 古屋哲夫

本研究は、近代日本においてアジアという言葉が、どのような情報にもとづき、どのような目的のもとに使用されてきたかを、明らかにしようとするものである。そしてそのためには、(1)アジアからの情報が日本にもたらされる道筋と仕組、(2)日本人のアジアへの要求のあり方と進出の仕方、(3)アジアの観念を利用した日本人の国民的使命感の創出、などの問題を検討することが必要となる。

班員 古屋哲夫 石川禎治 落合弘樹 藤井讓治 水野直樹 安富歩 山室信一 山本有造 横山俊夫 (以上所内) 筒井清忠 松尾尊允 (以上文学部) 秋定嘉和 (池坊短大) 伊藤之雄 (名古屋大) 奥村弘 (神戸大) 尾崎ムゲン (大阪女子大) 掛谷宰平 (立命館大) 桂川光正 (大阪産業大) 木坂順一郎 (竜谷大) 呉宏明 (精華大) 小泉洋 (六甲高校) 小路田泰直 (奈良女子大) 斎藤勇 (愛知大学) 里上竜平 (桃谷高校) 須崎慎一 鈴木正幸 (以上神戸大) 武邦保 (同志社女子大) 田中真人 (同志社大) 永井和 (立命館大) 福井直秀 (京都文化短大) 三原容子 (京大研修員) 松

田利彦 森田一彦 (以上京大研究生)

1992年

- 1月20日 1880年代より日露戦争にいたるアジア認識—自由党系を中心に— 伊藤
- 2月24日 第一次大戦後における国際関係認識とアジア認識 古屋

以上で研究報告を終了し、以後は報告書出版のための原稿とりまとめにはいつている。

近代東アジア世界の構造連関 班長 古屋哲夫

概してこれまでの「東アジア」研究は、東アジア諸地域におけるナショナリズムの発展を背景として、それぞれの社会・国家の自立化を対象とする一国史的研究とその比較という形で展開してきた。そのために、この地域の諸民族が「東アジア」世界における多面的な相関関係を規定しかつ規定されながら発展するという側面には十分な関心が払われてこなかったといえる。われわれは、近代「東アジア」において取り結ばれたこうした諸関係を総体としてとらえ、その起源と展開をあきらかにしたい。

とりあえずは日本部全体の研究会として発足し1年を経過したが、関心のある所内外おおくの方々の参加を呼びかけたい。

班員 古屋哲夫 飛鳥井雅道 落合弘樹 斎藤希史 佐々木克 塚本明 藤井讓治 水野直樹 安富歩 山室信一 山本有造 横山俊夫 (以上所内)

1992年

- 4月20日 満蒙イメージをめぐる 古屋
- 5月18日 明治前半期の日朝中関係 佐々木
- 6月1日 近代世界における思想連鎖 山室
- 15日 「帝国日本」のなかの朝鮮人 水野
- 9月21日 アジア交易圏の現代的構造 山本
- 10月5日 アジアにおける官僚制と軍隊 藤井
- 11月16日 近世東アジアの構造連関 塚本
- 12月7日 近世国学の対外観 飛鳥井

近世前期における政治的主要人物の居所と行動

班長 藤井讓治

近世前期において重要な役割を果たしてきた人物の多くは、江戸時代一般の像からすれば思いのほか活発な動きをしており、この期の政治史さらには文化史を考えていく上で、彼等のそれぞれの時点での居所を確定しておくことは、基礎的かつ不可欠である。そこで、このような基本的情報を学会全体が共

有できるように蓄積し、同時に従来年紀がないゆえに十分に利用されてこなかった主要人物の書状類の年代確定を行う。こうした作業を通じてこれまでとは異なる近世前期の歴史を描くことを目指している。本年は昨年に引き続き永井家文書を輪読するとともに、種々の史料集から主要人物に関する情報を集積し、7月以降は各自が担当した人物の居所と行動についての報告を行った。

班員 藤井讓治 塚本明 (以上所内) 柚田善雄 (京大研修員) 宇佐美英機 (京都橋女子大) 藤田恒春 (関西大) 横田冬彦 (神戸大) 母利美和 (彦根城博物館) 宮本裕次 (大阪城天守閣)

1992年

- 1月13日 永井家文書 宮本
- 老中奉書の様式について 塚本
- 1月27日 永井家文書 宮本
- 史料検索 全員
- 4月13日 永井家文書 塚本
- 史料検索 全員
- 4月27日 永井家文書 横田
- 畿内直轄領と代官について 藤田
- 5月11日 永井家文書 柚田
- 今後の打合せ 全員
- 6月8日 永井家文書 藤田
- 「上方八人衆体制」について 宮本
- 6月22日 永井家文書 母利
- 老中発給文書について 塚本
- 7月20日 永井尚政の居所 藤井
- 9月14日 小堀政一の居所 藤田
- 9月28日 中井正清の居所 横田
- 10月12日 中坊秀政・時祐の居所 柚田
- 10月26日 久貝正俊の居所 宮本
- 11月9日 井伊直孝の居所 母利
- 12月14日 以心崇伝の居所 塚本

文学からなにが見えてくるか 班長 飛鳥井雅道

4年目に入った班では、本報告と並行して日本最初のロビンソン漂流記の翻訳である『漂荒紀事』がオランダ語訳といかに文学的に、あるいは思想的な違いを含みつつ訳されていたかを究明しようとする会読書部会を、進めている。

両部会に共通しているのは、共に日常性からの「異境」「異界」を意識していることであり、本報告

も、会読部会も、いわゆる「近代」文学論には立っていない。またあえて、意識的に、日常からの脱出がどのように文学のテーマとなってゆくに、力点をおいた報告が積み重ねられている。日本の近世・近代が対象の中心になることは事実だが、東アジア19世紀における文学の転換、ロシア・フランス・ドイツ文学の変貌も報告の主要テーマの一つとなっている。班としては、まとめの時期に入っているが、オランダ語のロビンソン会読は依然として完了せず、こちらの方の成果刊行には若干の日時を要するかと苦慮している。

班員 飛鳥井雅道 宇佐美齋 大浦康介 落合弘樹 佐々木克 鈴木啓司 富永茂樹 藤田隆則 斎藤希史 (以上所内) 池田浩士 加藤幹郎 木村崇三原弟平 若島正 松田清 (以上教養部) 生田美智子 米井力也 (金蘭短大) 須田千里 (光華女子大) 谷川恵一 (高知大) 林完枝 (大阪市大) 平田由美 藤元優子 松村耕光 (以上大阪外大) 堀田桂子 (民博大学院) 濱田秀 (神戸大大学院)

1992年

- | | | |
|--------|-------------------------|-------------|
| 1月22日 | ロビンソン批評史 | 若島 |
| 2月12日 | 『漂荒記事』会読 | 米井 |
| 4月22日 | 中国のロビンソン | 斎藤 |
| 5月13日 | 明治初期のロビンソン評 | 谷川 |
| 27日 | 漱石とデフォー | 飛鳥井 |
| 6月17日 | 『漂荒記事』会読 | 平田 |
| 24日 | 「湖畔」をめぐる7つのことば | 須田 |
| 9月16日 | 殉教の連鎖 | 米井 |
| 30日 | 『漂荒記事』 | 平田 |
| 10月28日 | 歴史家に捏造された歴史 | 木村 |
| 11月11日 | 『漂荒記事』会読 | 平田 |
| 11月25日 | インドネシアのシャイールをめぐる | 土屋 |
| 12月25日 | 開国後の大衆芸能と演劇—その海外における受容— | (ゲスト・阪大) 三原 |

西 洋 部

家族とハウスホールドの比較史的研究

班長 前川和也

過去3年間にわたって、工業化以前の社会におい

て、「家族」ないし「ハウスホールド」の果たした様々な機能を考察してきた。最終年度にあたる1991年4月以降は、各班員の口頭発表、討論を中心に研究会を積み重ねるとともに、成果報告書の作成に向けて論文の執筆作業にかかった。92年の夏には再度討論の機会をもつことができ、原稿も順調に出揃った。なお成果報告書は1993年2月に『家族・世帯・家門—工業化以前の世界から』と題して、ミネルヴァ書房より刊行される予定である。

班員 前川和也 佐々木博光 田中雅一 富永茂樹 横山俊夫 (以上所内) 夫馬進 (文学部) 川島昭夫 (総合人間学部) 阿河雄二郎 南川高志 (以上大阪外大) 井上浩一 大黒俊二 (以上大阪市大) 江川温 川北稔 (以上大阪大) 川本正知 (奈良産業大) 小山哲 (島根大) 鈴木利章 (神戸大) 田中峰雄 (甲南大) 波多野敏 (京都学園大) 早川良弥 (梅花女子大) 三成美保 (大阪経法大) 山辺規子 (京都橘女子大)

1992年

- | | | |
|-------|--|---------|
| 1月14日 | 研究会方針討論 | 全員 |
| 28日 | 『女大学』再考 | 横山 |
| 2月4日 | 権威と家族—国民社会主義の家族イデオロギー— | 佐々木 |
| 18日 | ローマ帝政時代の結婚事情 | 南川 |
| | ステイタスと職業 | 班長 前川和也 |
| | 工業化以前の社会において、「職能」がもっていた意義と、それにまつわる社会的な威信が果たした機能を考察している。初年度の今年、法律家や弁護士などの様々な「職業」の形成や、前近代社会を律した様々な「身分」の展開に関する個別の具体的な報告が行われた。 | |
| | 班員 前川和也 佐々木博光 田中雅一 横山俊夫 (以上所内) 服部良久 夫馬進 (文学部) 川島昭夫 (総合人間学部) 阿河雄二郎 南川高志 (以上大阪外大) 井上浩一 大黒俊二 (以上大阪市大) 江川温 川北稔 (以上大阪大) 川本正知 (奈良産業大) 小山哲 (島根大) 鈴木利章 (神戸大) 田中峰雄 (甲南大) 波多野敏 (京都学園大) 早川良弥 (梅花女子大) 三成美保 (大阪経法大) 山辺規子 (京都橘女子大) | |

1992年

- 5月18日 1. 「ステイタスと職業」でなにが

	可能か, 2. 古代メソポタミアの職業リスト	前川
6月2日	イギリスの路上労働者と street cries	川島
16日	三身分論と社会人体論	江川
23日	近世ロンドンの居住パターン—身分・職業・財産	川北
7月7日	ヨーロッパ家族史のふたつのアプローチ	大黒
9月8日	12, 13世紀英国の新興役人層	鈴木
22日	バラモンのパラドックス—カースト論の検討	田中
10月6日	ヨーロッパ中世前期の祈禱記念資料における身分世界	早川
20日	説教史料にみる職業と身分—Berthold von Regensburg の場合	大黒
27日	アプー・ユースフの『税の書』(8世紀)にみる身分	川本
11月10日	コンスタンティノーブルの公証人	井上
17日	ヨーロッパにおける家族の伝統的制度の多様性と政治体質の多様性	エマヌエル・トッド (フランス人口研究所)
24日	ミニストリアーレン身分の諸問題	服部
12月1日	学識と身分—近世ドイツの法律家	三成

法的思考の研究 班長 山下正男

20世紀における論理学の研究はまことにめざましいものがあるが、そうした論理学はすべて存在の論理学と呼ばれるべきであって、当為の論理学の研究は大そうおこなわれている。本研究はそうしたアンバランスを是正することを目的とする。

そのために(1)義務論理学 (deontic logic) の確立, (2)法律家たちの現場における法的思考法の分析, (3)一般人の倫理・道徳の場における思考上の分析, 等の諸作業をおこないたい。以上の作業は理論学, 法学, 倫理学の各分野の専門家たちが共同しておこなうものとする。

班員 山下正男 井狩彌介 (以上所内) 足立幸男 (教養部) 阿部昌樹 川浜昇 田中成明 山本

克己 中山竜一 (以上法学部) 浜野研三 (文学部) 今井弘道 (北大) 植松秀雄 江口三角 (以上岡山) 亀本洋 (金沢大) 玉木秀敏 (大阪学院大) 服部高宏 (国学院大) 平井亮輔 (京都工織大) 平野仁彦 (三重大) 深田三徳 (同志社大) 松浦好治 (大阪大) 森際康友 (名古屋大) 山本顕治 (滋賀大) 若松良樹 (東和大) アスキュー・デイビッド 植木一幹
1992年

1月10日 自然権論の過去と現在—わが国の天賦人権論との関連で— 深田

1月24日 義務論的制約の根拠について 若松
以上を以て法的思考の研究班は解散し、その研究成果は『法的思考の研究』という題で人文研から刊行される。

正義システムの諸相 班長 山下正男

本共同研究班は義務論理学を強力な武器として援用しながら次の三つの順序で正義論の諸体系を研究するものである。(1)正義の観念論的諸体系, (2)正義の法的諸体系, (3)正義の法的諸体系のサバイバル・テスト。

本研究班は以上三項目のうち、(2)を中心テーマとするものである。すなわち各種実定法がいかなる正義をどの程度表現しているのか、また現行の実定法からこぼれ落ちている正義があるとすれば、どのような実定法を新たに追加すべきかが、(2)のテーマである。しかしそうした実定法の背後には、宗教的、哲学的、ユートピア的といったさまざまな観念的正義体系が潜んでいるはずであり、(1)では思いきり拡大された視野によって正義の問題を考察したい。最後に(3)においては、過去の、あるいは現存のいろいろな法体系が、その法体系を受け入れた集団あるいは集団のメンバーを無事に存続させえたかさせえなかったか、またさせようのか、させえないかに関するテストの可能性を論ずるものである。

班員 山下正男 井狩彌介 (以上所内) 足立幸男 (総合人間学部) 川浜昇 田中成明 中山竜一 山本敬三 山本克己 (以上法学部) 浜野研三 (文学部) 阿部昌樹 (大阪市大) 今井弘道 (北大) 植松秀雄 江口三角 (以上岡山) 亀本洋 (金沢大) 玉木秀敏 (大阪学院大) 服部高宏 (国学院大) 平井亮輔 (京都工織大) 平野仁彦 (三重

人 文 学 報

大) 深田三徳 (同志社大) 松浦好治 (大阪大) 院大)

森際康友 (名古屋大) 山本顕治 (滋賀大) 若松

1992年

良樹 (東和大) アスキュー・デイビッド 植木一

1月24日 ジェントルマン的な知識人 光永

幹 福井秀樹 耳野健二 毛利康俊

2月21日 「統治の合理性」の諸様相 水嶋

1992年

4月24日 研究の方向をめぐって 全員

5月8日 今後の研究方針 全員

5月8日 経済的秩序と政治的秩序のあいだ

5月22日 権利と効用 山下

阪上

6月12日 ハイエクのビデオを見る会

5月22日 N. ウェブスターと言語ナショナリ

アスキュー

ズム 小林清

6月26日 比喩と正義論 松浦

6月5日 民衆協会について (I) 富永

7月10日 研究の進め方についての検討会

6月19日 ベンサムの救貧論 光永

全員

7月3日 フランス革命前後の刑法 石井

9月25日 二種の社会契約論に関する予備的考

9月25日 家族国家観と近代日本の秩序 牟田

察 福井

10月16日 思弁的芸術論をめぐって 大浦

10月9日 正義論の対象—行為・結果・制度—

10月30日 「人間と市民の権利」のパフォー

若松

ンス (I) 水嶋

10月23日 憲法の私人間適用問題の再検討

11月6日 国民統合 西川

山本(敬)

11月20日 人口という対象 阪上

11月6日 ハイエクの科学論を読む 那須

12月4日 民衆協会について(2) 富永

11月27日 カール・シュミットにおける制度に

『儀礼的暴力の研究』 班長 田中雅一

関する理論について 権島

本研究班は過去二年間暴力の意味を社会的機能や

12月11日 公共政策における「正義」 足立

文化的な意味合との関連で総合的な視点から討論を

知識と秩序 (II) 班長 阪上 孝

重ねてきた。今年度は、成果の公刊を念頭に班員が

本研究班は、1990年3月で終了した共同研究「知

第一次資料に基づいて二度目の報告を行い、供犠に

識と秩序」の成果をふまえつつ、さらにフランス革

典型的に現われているような暴力の性格や、近代化

命期以降の近代諸国家の形成まで視野をひろげ、科

による暴力の意味の変化、物理的な暴力と儀礼的暴

学的知識と社会秩序の相互関係の再検討を進めてい

力との関連などが主要なテーマとなった。

る。3年目の現在は、政治的秩序、経済的秩序、文

班員 田中雅一 井狩彌介 佐々木博光 鈴木啓

化的秩序といったさまざまな観点から近代国家形成

司 谷 泰 富永茂樹 藤田隆則 (以上所内) 菅

の諸問題について議論を深めることができた。来年

原和孝 (総合人間学部) 青木恵理子 (民族学振興

度は、これまでにつみかさねてきた議論をふまえた

会) 阿部泰朗 (大手前女子大) 大越愛子 (近畿

うえて、研究のまとめを進める予定である。なお、

大) 大塚和夫 (都立大) 小田亮 (桃山学院)

今年の3月には、「知識と秩序」(I)の研究報告書

春日直樹 (奈良大) 川村邦光 松村一男 (以上天

『知識と秩序:近代におけるその再編過程』を『人文

理大) 栗本英世 小長谷有紀 田辺繁治 吉田憲

学報』(第70号、1992年3月)で発表した。

司 (以上民博) 滝口直子 (大谷大) 長嶋佳子

班員 阪上孝 富永茂樹 大浦康介 光永雅明

(大阪学院大) 松田素二 (大阪市内) 三浦耕吉

水嶋一憲 (以上所内) 浅田彰 (経済研) 木崎喜

郎 (関学大) 棚瀬慈郎 西井涼子

代治 田中秀夫 (以上経済学部) 服部春彦 小川

1992年

伸彦 (以上文学部) 石井三記 (和歌山医大) 市

1月20日 インドの性幻想と暴力:無限大の乳

田良彦 (大阪女子大) 小西嘉幸 小林道夫 (大阪

房・等身大の陽根 田中

市大) 小林清一 (滋賀短大) 西川長夫 (立命館

2月3日 心理療法的場面におけるシャーマン

大) 牟田和恵 (甲南女子大) 室井尚 (帝塚山学

とクライアントの関係:問題は解決

されたのか？	滝口	されていないが、会活における共軛性の証拠としての連関性の諸レベルについて考察が、更に追求されねばならないことが痛感された。
2月17日 儀礼のメッセージと権力：レックツォーマ（一種のウィッチクラフト）についての儀礼が、女性を巡る抑圧のシステムの中でいかなる機能を果たすか	棚瀬	班員 谷 泰 田中雅一 藤田隆則（以下所内） 細馬宏通（理学部） 菅原和孝（教養部） 北村光二（弘前大） 木村大治（福井大） 串田秀也（愛媛大） 高畑由起夫（鳴門教育大） 野村直樹（名古屋女子商科大） 澤田昌人（山口大） 野村雅一（国立民族学博物館） 早木仁成（神戸学院大） 深尾葉子（大阪外大） 水谷雅彦（神戸大） 宮脇幸生（大阪府立大）
3月2日 モースの供犠論とヴェーダ祭式	井狩	1992年
3月9日 サムサム（タイ・スピーキング・ムスリム）による支配文化の受容と抵抗：マレーシアとタイの比較	西井	4月13日 オノマトへの民族誌 鶴飼
4月20日 男の献身と女神の暴力：スリランカ・タミル漁村のジェンダーと儀礼	田中	4月27日 パソコン通信における文字顔使用について 細馬
5月18日 中間総括および今後の展望	谷・大越・栗本・田中	5月11日 物語形成過程におけるパフォーマンス 井口
6月1日 儀礼的動物殺し：フォーク・インタープリテーションとして	谷	5月25日 会話資料の提供とその分析 谷
6月15日 精霊憑依と暴力	田辺	6月8日 能のリズムにおける「形なき形」 藤田
6月29日 潜伏した暴力：フィジーのキリスト教化	春日	6月22日 ディスココミュニケーションをめぐって 木村
7月6日 虐げられた人々？：ブッシュマンと他民族関係をめぐって	菅原	7月13日 精神科閉鎖病棟の民族誌 野村
9月21日 文学を通してみるサドマゾヒズム	鈴木	9月14日 神経症治療におけるコミュニケーションのあり方 宮脇
10月5日 文化相対主義と暴力：文化の翻訳とエスノセントリズム	小田	9月28日 コミュニケーションのメタ自然誌（？）へむけて 水谷
10月19日 儀礼化される暴力：危機と憑霊の政治人類学	栗本	10月12日 Playback Examined Re-examined モアマン
11月16日 ギリシャ悲劇の暴力性と女性像：女による暴力と女への暴力	松村	10月26日 会話における参与の組織化について 串田
11月30日 ルイの身体：あるいは王殺しの衰退について	富永	11月9日 言及世界、関与態度、そして笑い 谷
12月7日 儀礼的暴力としてのジハード	大塚	12月14日 バレッセとエフェの夢の話 澤田
12月21日 追放された村長：チュワ社会における邪術	吉田	記号・意味・文学 班長 大浦康介
コミュニケーションの自然誌	班長 谷 泰	昨年度より発足したこの研究班は、文字一般に関する理論的探究をその目的とする。「文字とは何か」という古くかつ新しい問題を中心に据え、構造主義以降の言語学・記号論的成果を批判的に踏まえつつ、文学理論の新たな地平を美学、心理学、社会学など他の学問の領域とも関連づけながら模索しようとするものである。二年目にあたる今年は、昨年度の自

由発表から一歩進み、よりテーマを絞り込む形で発表・討論がなされた。

班員 大浦康介 宇佐美齋 斎藤希史 鈴木啓司
(以上所内) 田口紀子 吉田城 (以上文学部)
多賀茂 (総合人間学部) 東宏治 (同志社大) 石
田英敬 (東京大) 大石雅彦 (同志社大) 小西嘉
幸 (大阪市大) 小山俊輔 (立命館大) 丹治恒次
郎 (関西学院大) ビエール・ドゥヴォー (甲南女
子大) 山路龍天 (同志社大) 山田広昭 (神戸
大)

1992年

1月11日 幻想と物語の構造 田口
1月25日 詩とリアリティ 斎藤
2月22日 テキスト相関性の解釈はどこまで許
容されるか?—あるいは孤立語
nénuphar の植生 山路
3月14日 pli selon pli 石田
3月28日 久性十蘭の『魔都』 大石
4月25日 Le texte et l'image—La naissance de
l'écriture romantique chez Fromen-
tin— クリスタン (ゲスト講演)
5月16日 Fictions について 大浦
5月30日 ベレック『人生使用法』について
酒詰 (ゲスト講演)
6月13日 批評の原理—ポーの「構成の原理」
と探偵小説— 鈴木
6月27日 滑走感覚について—スポーツと日常
的世界— 亀山 (ゲスト講演)
7月4日 病気の名前—精神の医学における記
述と命名の問題— 多賀
10月17日 クリステヴァの記号論
原田 (ゲスト講演)
10月31日 類似, 異形, 抽象 丹治
11月14日 生成研究—理論と応用— 吉田
11月28日 話 (ハナシ) とは何か?—日本の話
芸のなかの身体— 小山
12月12日 Psychanalyse et génétique—Ecrire
comme on rature?— 山田
古典インドの法と社会 班長 井狩彌介

「法 (ダルマ)」は、インド文明の構造を理解する
ためにもっとも重要な鍵となる概念である。「ダル
マ」の観念は、古典インドはもとより現代に至るま

で、インド文明の社会秩序と文化規範の思考の枠組
みの基調低音をなすものとして機能し続けてきた。
このような「ダルマ」を中心主題として編纂された
文献群が「法典」である。本研究班は、ヒンドゥー
社会の行為準則集として成立した古典インド法典の
形成期に焦点をあててきたが、法典を狭義の法律集
成として扱うのではなく、いわばヒンドゥー教文化を
映す鏡として扱う立場を打ち出している。具体的
には、「ヤージュニャヴァルキア法典」を取り上げ、
インド学各分野の専門家の協力のもとに、その文体
と内容の分析を行いつつ、本法典の成立過程と内容
の歴史的な位置づけを検討する事を当面の作業課題と
している。第二年度に入り、本法典は全体のおよそ
半分の検討を終えたところである。

班員 井狩彌介 荒牧典俊 船山徹 山下正男
(以上所内) 徳永宗雄 御牧克巳 (以上文学部)
赤松明彦 (九州大) 永ノ尾信悟 土田龍太郎 横
地優子 (以上東京大) 榎本文雄 (華頂短大) 狩
野恭 黒田泰司 八木徹 (以上大阪学院短大) 後
藤敏文 後藤純子 藤井正人 (以上大阪大) 鳥岩
(金沢大) 正信公章 渡瀬信之 (以上東海大)
高島淳 (東外大A A研) 竹中智泰 (常葉学園大)
中谷英明 (神戸学院大) 林隆夫 (同社大) 弘田
弘道 (愛知学院大) 矢野道雄 (京都産大) 松田
祐子 (国際仏教大) 伏見誠 (学術振興会)

東 方 部

中国語の資料と方法 班長 高田時雄

3年目を迎えた本研究班では、引続き以下のような
研究発表がなされ、それに基づいて多角的な分析・
討論をおこなった。3年間の共同研究の成果は
近く論文集として刊行を予定している。

1月27日 「不」字を論じて『中原音韻』の成
立に説き及る 佐々木
2月24日 説文通訓定聲の字義體系 森賀
5月18日 名博本『和名類聚抄』について
木田
6月1日 仏典音義の南北 高田

法顯傳研究 班長 桑山正進

『法顯傳』の會讀である。5世紀初頭に中央アジ
アからガンダーラ、中インドを経てスリランカに渡
り、マヒンシャーサカ部の戒律の原典を得、南海よ

り中国に歸った法顯の行歴記は、文學上優れているばかりでなく、當時の中央アジア、インドの佛教事情を活寫している。19世紀の佛譯注1例、20世紀初めの英譯注3例、日本語譯注2例があるけれども、いずれも out of date である。當班は章巽『法顯傳校注』（上海古籍出版社、1985）をテキストにとりあげ、その注を読みつつ、これらの諸譯を照合し、また『水經注』の記事を参照して、據るべき現代語譯を作成する。あわせてその内容である五世紀の中央アジアとインドを班員の専門分野である歴史、言語、宗教、考古、美術などの多角視點をもって検討する。班員とその會讀分擔は以下のとおり。

高田時雄（序から校注説明まで）、森安孝夫（于闐まで）、吉田豊（竭叉から陀歴まで）、春日晴郎（烏婁から弗樓沙まで）、小野浩（那竭から毗荼まで）、定金計次（摩頭羅から沙祇大國まで）、入澤崇（拘薩羅舍衛國から佛般泥洹處まで）、中谷英明（毗舍離から苾舍王舊城まで）、武内紹入（伽耶城から多摩梨帝まで）、井狩彌介（師子國）、稲葉穰（浮海東還）、船山徹（高僧傳中の法顯、智嚴、寶雲の傳記）、榎本文雄（經錄等）。本年は春田分擔箇所までを終了した。

六朝美術の研究

班長 曾布川寛

1990年4月から5年の計画で始まった本研究班は、六朝を中心に後漢、隋唐時代を含めた時代を扱い、この時代の美術全般についてより精確な理解をめざそうとするものである。具体的な方法としては出土文物、石窟寺院などの佛教美術、画論や書論などの藝術論を三本の柱に取り上げることとする。今年は班員及び招請研究者による各々専門分野における合計18回の研究発表を行ったが、併せて造像記と藝術論の會読を行い、造像記として龍門石窟造像記（大内文雄、曾布川寛担当）、藝術論として積彦棕『後画録』（河野道房担当）、索靖『草書狀』（下野健児担当）、顧愷之『画雲台山記』（太田孝彦担当）を取り上げた。

前近代中國の法制

班長 梅原 郁

前近代の中國社會において、法制が重要な柱のひとつをなすことは言を俟たぬであろう。本研究班は、五年間の豫定でこの課題についての研究を深めてゆこうとするものである。本年度においては、律令格式という中國法典の骨格が形成された唐代に成った

『通典』の「刑法典」を通讀して古代法制史の概要をつかみ、一方で敦煌漢簡を中心とする新出の簡牘史料の釋読をもあわせて、共同研究を進めている。

中国古代礼制研究

班長 小南一郎

第4年目になる本研究班では、従来に引き続き、「周礼」春官篇を買公彦の疏で読みつつ、本文と鄭注とに対して訳注を付けている。本年度は、もっぱら音楽や歌舞を記述した部分を読んで、大司樂から小胥まで進んだ。春官篇の經文を半ばまで読んだことになる。こうした読解と並行して、班員による研究発表が行われた。

中國技術史の研究

班長 田中 淡

本研究班は、1991年4月から向こう5箇年の豫定で、中國の傳統的技術の特質について、とくに生活科學・技術の關連分野を主たる対象としてとりあげながら、検討を加えてゆこうとするものである。當面、研究會は技術史全般に關わる分野を主とし、關連の特定分野を副とする二本だての構成をとり、前者は元・王禎の『農書』、後者は梁啓雄輯『哲匠録』疊山篇をそれぞれテキストとして選び、會讀・譯注作成をすすめてゆく豫定である。また、それと並行して、技術史の諸分野にわたる班員の研究発表を随時おこなってゆく。

標記の期間に、『農諸』農器圖譜・田制門、耒耜門の譯注を田中 淡・宮島一彦・櫻井謙介・相川佳子子・山本徳子・渡部 武・白杉悅雄・武田時昌、『哲匠録』疊山篇の校補・譯注を外村中・白幡洋三郎がそれぞれ擔當した。

明末清初の社会と文化

班長 小野和子

昨年度に引き続き、明末清初の政治・社会・經濟・文化など、各方面からする研究報告を重ねるとともに、この時期の代表的な人物の伝記類について會読を進めた。この間、中国その他諸外国からの参加者も多く、この時代の歴史的意義について意見を交換し、また新出の史料について情報を得ることができた。

六朝道教の研究Ⅱ

班長 吉川忠夫

『真誥』7篇全20卷の會讀をひき續いて行い、茅山の宗教地理に關する第11卷・第12卷稽神樞篇1・2の譯注を作成した。なおその間、2月には、前回の研究班の成果報告として、『中國古道教史研究』を同朋舎出版から刊行した。収載論文は13篇である。

秦漢隋唐の文物資料	班長 礪波 護	2月25日	ジェイムズ『宗教的経験の諸相』	光永
本研究班では昨年に引き続き、隔週水曜日の研究会で出土文物に関する班員の研究発表が行われた。		3月10日	リン・ホワイト『機械と神』	村上 (ゲスト)
中華文人の生活	班長 荒井 健	4月14日	事務局打合せ	
1991年度より2年間、旧中国の文人の生活全般について、総合的に検討してきた本班は、今期も各分野の研究報告および討議を行い、93年3月に研究終了する。その成果は論文集「中華文人の生活」(仮題)として、「長物志」訳注とともに公刊予定。		28日	人文学の外在的解剖	山田
1920年代の中国	班長 狭間 直樹	5月12日	ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』	井狩
本研究班は、研究する時期を「20年代」にしぼることによって、時代史的視角、および世界史の共時的視角から国民革命期中国の諸相をとらえなおそうとするものである。各班員が、政治、経済、社会、思想、文化などの諸テーマについて研究をすすめてきたが、最終年度にあたる本年は4年間の蓄積をもとにさらに総括的な研究発表をおこなった。このほか、本研究班は国外の研究者とも積極的に交流の機会を持つようつとめている。1月10日習五一氏(北京社会科学院副研究員)、5月8日唐振常氏(上海社会科学院歴史研究所研究員)、5月29日王曉秋氏(北京大学歴史系教授)、10月9日金観濤氏(香港中文大学中国文化研究所研究員)の報告は、それぞれ本研究所来訪のおりにお願いしたものである。		5月26日	エンゲルス『空想より科学へ』	山室
		6月9日	ウイットフォーク『東洋的専制主義』	前川
		6月23日	「見せる」天皇から「額縁」の天皇へ	佐々木 (克)
		7月7日	ベーコンのイドラ説について	富永
		9月22日	編集者からみた人文学	八木・勝股 (ゲスト)
		10月13日	知っていることを知っているー「笑い」再考	谷
		10月27日	書くこと、あるいは演戯と変身	宇佐美
		11月10日	人文学とコンピュータ	小野 (ゲスト)
		12月8日	ウィリアム・テルの末裔たち	佐々木 (博)

客 員 部 門

人文学のアナトミー 班長 山田慶兒
 グランド・セオリーの有効性が疑わしくなり、人文諸科学の専門化と細分化が進んだ現在、人文学は一つの転機に立っている。この研究会は、この知的な好機をふまえながら、人文学の方法論を中心とする新しいパラダイムの構築をめざしている。当面の課題は、これまで蓄積されてきた人文諸科学のテキストの再検討にあるが、その重点は、テキストを歴史の実証の観点から読むことでなく、そのテキストがふくむ可能性を抽きだす読み方で読むことにある。
 班員 山田慶兒 荒井健 井狩彌介 宇佐美齋 大浦康介 阪上孝 佐々木克 佐々木博光 鈴木啓司 田中雅一 谷泰 富永茂樹 藤田隆則 前川和也 光永雅明 山室信一 (以上所内) 水嶋一憲
 1992年
 1月21日 ヒトラー『わが闘争』 佐々木 (博)

Ⅱ 個 人 研 究

日 本 部

日本ファシズムの研究	古屋 哲夫
日本近代文化史の研究	飛鳥井雅道
廃藩置県の研究	佐々木 克
植民地経済の研究	山本 有造
文化史および文明史としての国民国家の形成	横山 俊夫
日本近世社会における政治権力	藤井 譲治
政治文化の中の社会理論	山室 信一
近代朝鮮の政治と社会	水野 直樹
日本近世の地域社会の研究	塚本 明
士族の研究	落合 弘樹
文学と近代	齋藤 希史
貨幣の研究	安富 歩

西 洋 部

西洋論理想思想史
 社会的相互行為の解読
 思想と制度
 シュメール行政・経済文書の研究
 インド世界の儀礼の研究
 フランス散文詩の研究
 群衆現象の社会学
 南アジアにおける宗教と社会
 文学理論の研究
 デカダンス文学における自己矛盾の研究
 音声形式の記述と分析
 フレデリック ハリソンとイギリス実証主義
 ドイツ中世のエトノス

山下 正男
 谷 泰
 阪上 孝
 前川 和也
 井狩 彌介
 宇佐美 齊
 富永 茂樹
 田中 雅一
 大浦 康介
 鈴木 啓司
 藤田 隆則
 光永 雅明
 佐々木博光

唐宋時代の士人
 宋元道教研究
 明清時代の官僚制度
 六朝時代學術史の研究
 中国の伝統的品詞観
 中国仏教美術の研究

中砂 明德
 横手 裕
 谷井 陽子
 木島 史雄
 森賀 一恵
 稲本 泰生

東 方 部

中国の詩学
 宋代の官僚制度
 六朝隋唐精神史
 隋唐政治社会史研究
 五四時期中国社会主義の研究
 ポスト=クシャーン期中央アジアの考古学的研究
 古代中国における説話伝承の研究
 東林党の研究
 原始佛教起源論
 中国中世土地所有制の研究
 六朝道教思想研究
 中国美術の様式と意味
 中国建築の様式・技法・空間
 近代中国の綿紡織業
 敦煌文書の言語史的研究
 中国古代中世の法制
 先秦時代の金文
 漢唐間における天文学と文化
 イスラーム勢力進出期のアフガニスタン・北インド
 唯識思想研究
 中国共産主義運動の歴史と思想

荒井 健
 梅原 郁
 吉川 忠夫
 礪波 護
 狭間 直樹
 桑山 正進
 小南 一郎
 小野 和子
 荒牧 典俊
 勝村 哲也
 麥谷 邦夫
 曾布川 寛
 田中 淡
 森 時彦
 高田 時雄
 富谷 至
 浅原 達郎
 新井 晋司
 稲葉 稜
 船山 徹
 石川 禎浩

1992年7月 於 本館大会議室
 一越境する人々—
 10日 群衆が動くとき—フランス革命祭典
 への道— 阪上 孝
 紫禁城のドルゴン 谷井 陽子
 王道楽土を行く—「満洲国」往還—
 山室 信一
 11日 中国の近代化と越境現象 森 時彦
 漂流する小説 齋藤 希史
 シンポジウム 全 講演者

事 業 概 況

夏期公開講座

開所63周年記念公開講演会

1992年11月5日 於 本館大会議室
 自作を語る作家たち—創作法の公開について—
 鈴木 啓司
 端方と二枚の写真 浅原 達郎
 公卿の拳兵と草莽—赤報隊の結成などを
 めぐって— 佐々木 克

研究成果の刊行

I 紀 要

人文学報 第69号

ヨーロッパ哲学の困った癖について—ポルフィリオ
 スの樹を手がかりとして— 山下 正男
 「精神権威」と「効率」—フレデリック・ハリソンの
 選挙法改正論をめぐって— 光永 雅明
 満洲中央銀行の資金創出・資金投入メカニズム—日
 中・太平洋戦争期を中心に— 安富 歩
 〈小説〉の冒険—政治小説とその華訳をめぐって—
 齋藤 希史

人文学報 第70号

国民 (Nation) 再考—フランス革命における国民創
出をめぐる— 西川 長夫
フランス革命における知識と秩序 阪上 孝
徳と効用のあいだ—フランス革命期における科学と
芸術— 富永 茂樹
保証の転位—国家的抑止の成立—市田 良彦
フランス革命期の法学教育・司法制度・法曹
石井 三記
カバニスの人間心身関係論—その思想と人間観—
大東 祥孝
アメリカン・デモクラシーと法の支配—新たな共和
政の秩序を求めて— 小林 清一
彙報 (1991年1月~1991年12月)

人文学報 第71号

自然言語に災いされたヨーロッパ哲学 山下 正男
家畜と家僕—去勢牡誘導羊の地理的分布と
その意味— 谷 泰
出自神話でみるドイツ史 佐々木博光
廃藩置県と民衆—西日本における旧藩主引留め「一
揆」をめぐる— 谷山 正道
熊本藩明治三年藩政改革と人民諸階層 三澤 純

東方学報 第64冊

天命と徳 小南 一郎
王杖十節 富谷 至
裴休傳—唐代の一士大夫と佛教— 吉川 忠夫
樸學の背景 井上 進
宋史刑法志譯注稿(上)中國近世の法制と社會研究班
彙報 (1991年1月~1991年12月)

ZINBUN (歐文紀要) No. 26

Jean-Marie SCHAEFFER, La fiction litteraire
Yasusuke Oura, Narrateur e(s)t personnage <II>
Keiji Suzuki, Essai sur Joséphin Péladan III-La déca-
dence et l'occultisme
Masaaki Mitsunaga, The English Positivists and Japan
Institute for Research in Humanities, Staff and Semi-
nars : 1991

II 研究報告その他

中国国民革命の研究 狭間直樹編
1992年3月31日刊
慧超往五天竺國傳研究 桑山正進編
1992年3月31日刊
所報「人文」第38号
1992年3月31日刊

所 員 動 静

- ・山田慶兒国際日本文化研究センター教授は、併任教授 (西洋部)。(比較文化研究部門, 4月1日~1993年3月31日)
- ・岸本美緒東京大学助教授は、併任助教授 (東方部)。(比較文化研究部門, 4月1日~1993年3月31日)
- ・岩熊幸男 (西洋部) 講師は、辞職 (3月31日付)の上、福井県立大学教授に転出。
- ・浅原達郎氏を助教授 (東方部) に採用 (4月1日付)。
- ・木島史雄氏を助手 (東方部) に採用 (4月1日付)。
- ・森賀一恵氏を助手 (附属東洋学文献センター) に採用 (4月1日付)。
- ・辻 正博 (東方部) 助手は、滋賀医科大学医学部助教授に昇任 (5月16日付)。
- ・稲本泰生氏を助手 (東方部) に採用 (11月16日付)。
- ・荒牧典俊教授 (東方部) は、2月2日伊丹発、カリフォルニア大学、中国社会科学院等に於いてセミナー等出席及びインド仏教思想史に関する研究資料蒐集を行い、6月3日帰国。
- ・山本有造教授 (日本部) は、文部省在外研究員旅費により、3月20日成田発、ロンドン大学、フランス・国立文書館、ピサ大学等に於いて「お雇い」鉦山技師エラスマス・H. M. ガワーに関する研究資料蒐集を行い、5月18日帰国。
- ・富谷 至助教授 (東方部) は、3月23日伊丹発、ケンブリッジ大学、スウェーデン・国立民俗学博物館等に於いて海外所蔵の中国出土文字資料の研究及び研究資料蒐集を行い、9月28日帰国。
- ・麥谷邦夫助教授 (東方部) は、委任経理金により、

- 3月24日伊丹発、上海社会科学院に於いて三教交渉関係に関する研究資料蒐集を行い、4月17日帰国。
- ・狭間直樹教授（東方面部）は、4月24日伊丹発、広東省社会科学院、汕頭大学等に於いて学術交流及び研究資料蒐集を行い、5月7日帰国。
 - ・梅原 郁教授（東方面部）は、5月23日成田発、ヴィクトリア・アルバート美術館、ブリティッシュライブラリー等に於いて学術交流及び研究資料蒐集を行い、6月1日帰国。
 - ・梅原 郁教授（東方面部）は、7月6日成田発、ギメー博物館、インド美術博物館、大英博物館等に於いて中国唐・宋時代の法制・社会史に関する研究資料蒐集を行い、8月10日帰国。
 - ・前川和也教授（西洋部）は、委任経理金により、7月18日伊丹発、大英博物館、イスタンブール考古博物館に於いてシュメール粘土板文書に関する研究及び研究資料蒐集を行い、8月28日帰国。
 - ・谷 泰教授（西洋部）は、7月29日伊丹発、ミラノ大学、アブルッツォ・チェルケト村に於いてイタリア中部山村での文化人類学に関する研究資料蒐集を行い、9月9日帰国。
 - ・田中 淡助教授（東方面部）は、8月9日伊丹発、中国社会科学院、應県木塔、独楽寺等に於いて古建築保存修復の実態調査及び研究資料蒐集を行い、8月23日帰国。
 - ・水野直樹助教授（日本部）は、8月10日伊丹発、スタンフォード大学、ハーバード・エンチン研究所に於いて朝鮮近代史、東アジア関係史に関する研究及び研究資料蒐集を行い、1993年8月31日帰国予定。
 - ・井狩彌介教授（西洋部）は、委任経理金により、8月17日伊丹発、マドラス政府図書館、ムンネーシュヴァラム・ヒンドゥー寺院等に於いてヒンドゥー教写本及びヒンドゥー教祭式に関する調査並びに研究資料蒐集を行い、9月6日帰国。
 - ・宇佐美 齊助教授（西洋部）は、8月21日伊丹発、フランス国立図書館に於いてフランス近代詩、特にランボーに関する研究資料蒐集を行い、9月22日帰国。
 - ・齋藤希史助手（日本部）は、8月28日伊丹発、北京大学に於いて中国文学理論史に関する研修及び研究資料蒐集を行い、1993年8月31日帰国予定。
 - ・横手 裕助手（東方面部）は、文部省科学研究費補助金により、9月8日成田発、北京白雲觀、天后宮等に於いて中国における道教の現状に関する調査及び研究資料蒐集を行い、11月6日帰国。
 - ・吉川忠夫教授（東方面部）は、9月17日伊丹発、陝西師範大学、武漢大学に於いて第4回魏晉南北朝史学会出席及び六朝隋唐精神史に関する研究資料蒐集を行い、10月2日帰国。
 - ・高田時雄助教授（東方面部）は、委任経理金により、9月17日伊丹発、大英図書館、フランス・国立図書館、カイロ大学等に於いて中央アジア発現多言語写本に関する研究及び研究資料蒐集を行い、10月16日帰国。
 - ・山室信一助教授（日本部）は、9月23日伊丹発、上海社会科学院に於いて日中国交20周年記念日中国青年研究者会議出席及び研究資料蒐集を行い、9月28日帰国。
 - ・桑山正進教授（東方面部）は、10月1日伊丹発、大英博物館、イタリア中東極東協会等に於いてガンダーラ美術考古学会議出席並びにガンダーラ遺物に関する調査及び研究資料蒐集を行い、10月22日帰国。
 - ・谷 泰教授（西洋部）は、12月23日成田発、ミラノ大学、マンチェスター大学等に於いてイタリア・サンドリオ周辺での民族学的調査及び研究資料蒐集並びに研究論文発表のための打ち合わせを行い、1993年1月10日帰国。
 - ・今西錦司名誉教授は6月15日逝去された（90才）。